

一八八二年十月二十二日(日)

聖ラーマクリシュナ、ヴィジャヤの日に南神ドツキネーシヨルの寺院で信者と共に

霊像冥想——母性冥想

タクール、聖ラーマクリシュナは、南神村ドツキネーシヨルの寺院内におられる。時間は午前九時ころ、小ベッドで横になって休んでおられ、床にはモニが坐っている。彼と話をしていらっしゃる。

今日はヴィジャヤ(祝日)の日。キリスト暦一八八二年十月二十二日、日曜日。アツシン月白分十日目。近頃ラカールは、タクールの許もとで暮らしている。ナレンドラ、バヴァナートは時々往来ゆききしている。タクールといっしょに、甥おいのラームラルさんとハズラー先生が生活している。ラーム、マノモハン、スレシユ(スレンドラ)、校長、バララームといった人たちもほとんど毎週、タクールにお目にかかりに来ている。バブラームはまだ、一度か、二度、来ただけである。

聖ラーマクリシュナ「お前、祭りの休暇をとったのかい？」

モニ「はい、とりました。私は祭りの七日目、八日目、九日目は終日、ケーシャブ・センの家に行っておりました」

聖ラーマクリシュナ「ホウ、そうかい！」

モニ「ドウルガーの祭りについて、面白い説明をたくさん聞きました」

聖ラーマクリシュナ「話してごらんよ」

モニ「ケーシャブ・センの家では、毎日、朝の祈りをいたします——十時、十一時ころまでです。

その朝の祈りの時に、あの方はドウルガー祭りの説明をなさったのです。あの方はこうおっしゃいました——『もし人が大実母をつかめば——つまり、大いなる母ドウルガーをわが胸の宮に安置すれば、ラクシュミー、サラスワティー、カールッティカ（カールッティケーヤ || 軍神スカンダ、仏教では韋駄天）、ガネーシャたちは自然と従いて来て入って下さる。ラクシュミーは富と繁栄、サラスワティーは知識、カールッティカは勇氣、ガネーシャは成功、こういうものが皆、自然に出来てくる。もし、大実母が胸の中に入って下されば——』と」（訳註、ベンガル地方では、ラクシュミー、サラスワティーはドウルガーの娘、カールッティカ、ガネーシャはドウルガーの息子とされている）

（訳註）ヴィジャヤ——ベンガル暦アツシン月白分一日から十日間つづくドウルガー祭りの十日目、最終日のお祭りの名称で、正式にはヴィジャヤ・ダシャミーと言う。ヴィジャヤは勝利、ダシャミーは十日を意味する。それまでの九日間はナヴァ・ラートリーと言ひ、ナヴァは9、ラートリーは夜を意味し、九日間にわたり女神が悪魔と戦う。ベンガル地方ではドウルガー祭りの期間中、特に七日目から十日目を中心に盛大に祝う。ヴィジャヤの日は、ドウルガー女神が悪魔に勝利したことを祝うと同時に、役目が終わって魂が抜けたドウルガー女神の神像をガンジス河に沈める日でもある。

〔タクール、聖ラーマクリシュナのナレンドラなど内輪の人たち〕

タクールは、モニの報告を一通りお聞きになって、間にときどきケーシャプ家の札拝について質問されていた。そして最後に言われた。

「お前、あつちへ行ったり、こつちへ行ったりするんじゃないよ。ここへだけ来ていなさい。

ほんとに親しい身内の人たちは、ここへだけ来る。ナレンドラ、バヴァナート、ラカールたちはわたしの身内だ。大事な人たちだよ。そうでお前、この連中を一日、食べさせてやつてくれ！ ナレンドラのことをどう思うかね？」

モニ「はあ、非常に立派な青年だと思います」

聖ラーマクリシュナ「ご覧、ナレンドラには沢山の長所がある。歌はうまいし、楽器も弾けるし、学問にも優れているし、その上、抑制力セリウフレストロウがあつて、結婚はしないと云っているよ。子供のころから神様に心を寄せているんだ」

タクールは、モニと又いろいろ話し続けられる。

〔人格神か無相の实在か——靈チンマイの具現なる像の瞑想と母性瞑想〕

聖ラーマクリシュナ「ところでお前は、最近どんなふうにして神を瞑想しているのかね？ お前は人格神がいいと思うか、それとも、無相ニラの实在カイラの方がピツタリくるかね？」

モニ「はあ、現在の心境では、形サある神カイラを拝む気持ちにはなれません。そして、無相ニラの实在カイラに

心をしつかり固定させるといふことも、どうもまだ出来ないでいます」

聖ラーマクリシュナ「わかったね？ 〃無相の实在に、最初から心をつなぎとめることは出来ないのだ。はじめのうちは、人格神を拜むのが一番いいことなんだよ」

モニ「土でこしらえた像を瞑想するのですか？」

聖ラーマクリシュナ「どうしていけない？ 魂のこもった尊いお像だよ」

モニ「はあ、それにしても、手や足やなんかのことも考えないわけにはいきませんか？ ですが、あなた様がおっしゃいましたように——最初の段階では、形あるものを瞑想しないと心が落ち着かない、ということもわかります。そうだ、あの御方は様々な形をおとりになるのですから、自分の母親の姿を瞑想してもよろしいわけだと思えますが？」

聖ラーマクリシュナ「ああ、あの方〔母親〕はグルだよ。大実母カーリーそっくりそのままだ」

モニは黙ってしまった。

しばらくしてから、またタクルルに質問し始めた。

モニ「あのう、〃無相の实在」といふものは、どんなふうにしてわかるものなのでしょう？ とても説明出来ないものなのですか？」

聖ラーマクリシュナは少し考えて、

「それがどんな様子かって？」

こう言われて、タクルルは少しの間お口をつぐんでおられたが、やがて、人格神（有形の神）と無相の

实在(無形の神)を覚えることはどのような経験なのか、少し話して下さった。そして、タクールは再び沈黙された。

聖ラーマクリシユナ「分かっているだろうが、これを正しく理解するには靈の修行が要る。部屋の中にある宝玉を見たい、手に取りたいと思えば、カギを持ってきて扉の錠前を開けるだけの手数をかけなくちゃならん。それから宝玉を外へ持ち出すのだ。そうでなくて、錠の掛かった部屋の戸のそばに突っ立ったままで、さあ、私は戸を開けた。さあ、寶石箱の錠を外した。さあ、宝石を取り出した。なんて思っているだけじゃ仕様がないだらう。修行をしなければだめだよ」

タクールは無限、無限なる神——いろいろな道——聖なるブリンダーヴァンを見る

〔智者の意見では神の化身は無数である——クテイチャカ——聖地について〕

聖ラーマクリシユナ「ジュニヤーニ「アウァタール智者たちは無相の实在を想っている。そして神の化身を認めない。アルジュナは聖クリシユナに対して、『あなたは完全なブラフマンだ』と言って讚えた。クリシユナはアルジュナに言われた。『わたしが完全なブラフマンであるかどうか、付いてきて見なさい』と。そう言つてある場所へ連れて行つて、『何が見える?』と訊いた。アルジュナは、『とてつもなく大きな樹が見えます。それには黒い木イチゴの実が、房のようになって下がっています』クリシユナが、『もつと近寄つて、よく見てごらん。そうすれば黒い実の房ではなくて——クリシユナが房のように無数に生なつているのがわかる——わたしのような』つまり、かの完全なるブラフマンの樹から、数えきれな

いほどの化身が現れたり消えたりしているのだ。

カビル・ダース(十五世紀の聖者でラーマナンダの弟子)は、無相の实在というものに大そう心を惹かれていた。クリシュナの話を聞くと、カビル・ダースはいつもこう言うのが癖だった——『ああいう人物を、なぜ拜むのかなあ、乳^ゴしほり^ヒ女^リたちの手拍子に合わせて、猿踊りばかりしておられたんだよ!』と。

アハハハハハ。わたしはね、人格神を信じる人のところでは人格神、そして無相の实在を信じる人のところでは無相の实在だ」

モニ「はっはっは。いまお話し下すっている神様が無限であるように、あなた様も無限であられます! あなた様の深さは測れません」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハ、とうとうわかつたかね! 知っているだろうが——どんな宗教でもいいから、ある期間奉じていなければならん。いろんな道を通らなければならぬよ。玉あそびの小球は、全部の穴を廻ってこなければならぬだろう? 真ん中に上がってしまえば、どこにも負けない」

モニ「おおせの通りです」

聖ラーマクリシュナ「ヨーギーには二種類ある——ヴァフダカとクティチャカ。たくさん聖地を巡礼して歩きながら、まだ心の平安を得ていない修行者をヴァフダカと言う。クティチャカは、ひと通り廻ってきて心が落ち着き、平安な気持ちになったヨーギーだ。——一つの場所に座を組んで坐り、

もう動き廻らない。決まった土地で坐っていれば、それで十分心楽しいのだ。この上、聖地参拝など必要ないのだ。もし行くことがあっても、それはただ、新しい靈感を得るためだ。

わたしはある時期に、いろいろな宗教のやりかたを、ひとつひとつ実行しないではいられなかったものだ。ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教、——ヒンドゥー教のなかでもシャクティ派、ヴィシュヌ派、ヴェーダーンタ派、それぞれの道を皆、踏み込んでみた。覚ったことは、あの唯一つの神に——あの御方のところへすべてのものは向かつて行く、ということだ——色々、様々な道を通つてだよ。

聖地へ行ったときは、ときどきひどい目に遭つた。カーシーでシエジヨさんたちとラー ज्याさんの客間へ入つていた。そこであの人たちは世間話をしているんだよ！——金や土地のことなんだ。話を聞いているうちに、わたしは泣き出してしまった。こう言つてね——『大実母^マ、わたしをとんでもないところに連れてきて！ 南神村^{ドブキネーシヨル}にいた方がよっぽどよかつたのに』 プラヤーガ(ガンジス河とヤムナー河が合流するところ、現アッラーハーバード)ではどこへ行つてみても、同じような池や草や、同じような樹や、同じようなタマリンドの葉っぱがあるばかり！ ただ違うのは、遠い西の方からきた人たちのモミガラのようなうんこと。アツハハハハハハ

モニ「ハツハツハツ——」

聖ラーマクリシュナ「だが、聖地巡礼は霊的なシゲキになることは確かだよ。マトゥールさん^{バーブ}といつしよにプリンターヴァンに行つた。マトゥールさん^{バーブ}の家の女の人たちもいつしよだったし、フリダイもだ。カーリヤダマン・ガートを見るや否や、あの御方に対する気持ちが燃え上がつて——わたしは

もう、外界の意識がなくなつたようになってね！ フリダイがそのヤムナー河のガートで、まるで小さな子供の面倒を見るようにしてわたしを沐浴させてくれたつけ。(訳註、カーリヤタマン・ガート——布林ターヴァンのヤムナー河畔にある水浴場^{ガート}で、聖クリシュナが毒蛇カーリヤを退治したという伝説のあるところ)

ヤムナーの岸辺を、夕方、散歩に行つたものだ。ヤムナーの砂地づたいに——その時分になると囲い場から牛がみんな帰ってくるんだよ。それを見るや否や、わたしのクリシュナに対する情熱が燃え上がつて、気違ひみたいにわたしは走り廻つた——。クリシュナはどこだ、クリシュナはどこだ、こう言い続けながらね。

駕籠^{パレンキ}に乗つてシャーマクンダとラーダークンダに行く途^{みち}で、ゴーヴァルダナ山を見るために駕籠から下りたが、その山を見るが早いか、たちまち興奮してしまつて、ゴーヴァルダナ山にかけ上がつて頂上に突つ立つていた——外界の意識をすっかりなくしてしまつてね。そのとき、その辺(ウラジャ)に住んでいる人たちが来て、わたしを山から下ろしてくれただ。シャーマクンダ、ラーダークンダ(両方共、マトゥラー近郊の池)の途中のあの牧場や、それから草木や鹿などを見ると、自分でもどうしようもないほど気持ちが高ぶつてしまふのだよ。目から溢れる涙で、着物がビッシヨリになつてしまつた。心の中でクリシュナに訴え続けた。『みんな昔のままなのに、あんなだけが見あたらない』駕籠^{パレンキ}のなかに坐つたまま、口を利く元気もなく黙つて坐つてたよ！ フリダイが駕籠に付き添つていたが、担^かいでいる連中に言つてきかせていた——。よく、よく、気を付けて歩いておくれ。

ガンガーマーイー(ガンガーマーター)がとてもよく面倒を見てくれたつけ。相当な年寄りだったな。

ニドゥッヴァン^{ニドゥッヴァン}の森の近くの小屋にひとりで住んでいた。わたしの様子と前三昧状態を見ては、『このお方は、ラーダー(クリシュナの恋人)が化身して生まれ変わってきなすったのだ』と言っていた。そしてわたしのことをドゥラリ(ラーダーの愛称)と呼ぶんだよ! あの人といっしょにいると、わたしは食べることも、住居に帰ることも、みんな忘れてしまった。フリダイが毎日、住居から食物をもつて食べさせに来た。あの人も自分で食物をつくってはわたしに食べさせてくれた。

ガンガーマーイーもよく霊的気分になった。その様子を見に大勢の人が集まってきた。ある日、前三昧状態でフリダイの肩に上がった。

ガンガーマーイーのそばを離れて郷里^くへ戻ろうという気持ちは、わたしにはなかった。あれこれ、みんな泊まる用意をして、わたしは炊いた米を食べることにして——。ガンガーマーイーの寢床は部屋のあつちの端に置いて、わたしの寢床はこつち端に置くことにして、すっかり手筈を整えた。フリダイが、『あなたの胃はとても弱いんだが、誰が面倒をみるんですか?』と言ったら、ガンガーマーイーはこう言った——『おや、そんなこと、この私が見ますとも。私が何でもお世話しますよ』ってね。それで、フリダイがわたしの手を引っ張って連れ出そうとすると、ガンガーマーイーは反対の手を引っ張る。——ちよūdどその時、母のことを思い出してしまった——南^{ドゥクネー}神村^ンのカーリー^ナ神殿^{ハバト}の音楽塔^ナに一人で住んでいる母のことを! さあ、もう泊まるわけにはいかない。それで、『いや、わたしは帰らなくちゃならない!』と言った。

プリンダーヴァンはいいところだよ。新しい旅行者が来ると、ヴラジャ(マトゥラーの近く)の子供た

ちが、ッハリ・ボロ(神の名、称えよ)、ガトリーコロ(荷物を下ろせ)とはやしたてるんだよ」

十一時を過ぎてから、タクール、聖ラーマクリシユナは、大実母カーリーのプラサード(供物のお下がり)を昼の食事として召し上がった。昼にすこし休息をとられた後は、再び信者たちと会話をされながら、時々、オームを称えたり、ッおー、チャイタニヤッ(口に)と口にされたりしておられた。

神殿では夕べの礼拝アーラデー献灯が始まった。今日はヴィジャヤである。聖ラーマクリシユナがカーリー殿に行かれて大実母を拜まれる。信者たちはタクールの御足の塵ちりをいただいた。ラームラルが大実母カーリーカーリーに献灯アーラデーをしていた。タクールはラームラルを声高に呼ばれた。「おーい、ラームラル！ どこにいる！」

大実母カーリーカーリーにお神酒シッデーが供えられてあった。タクールは、それを少しお舐めになるおつもりなのだ。そのためにラームラルをお呼びになったのだ。そのほかの信者たちにも皆、少しずつ分けてやるようにおっしゃった。(訳註、シッデー——神に捧げる飲み物で、すりつぶした大麻などの気分を高揚させる麻薬性、中毒性の成分を含んでいる)